

第3回国連防災世界会議 パブリックフォーラム出展 概要

(一社)日本応用地質学会は(公社)日本地すべり学会と共同で、去る3月14日から18日にかけて仙台市にて開催された第3回国連防災世界会議(WCDRR)パブリックフォーラムの防災展示に出展した。

展示タイトルは『地質災害—巨大地震に備えた減災の取り組み』で、具体的には、

- 1) 想定宮城沖地震を念頭においた、一般向け「地震防災」シンポジウムと普及活動
- 2) 2008年岩手宮城内陸地震で生じた山地部の地質災害事象解明調査・研究公表
- 3) 大地震で発生する地すべりの分析による、行政向けの危険箇所予測手法提案である。

1) は東北支部が一般市民(非専門家)を対象に、2003年度から実施していた、想定宮城県沖地震を念頭に置いた一連の地震防災シンポや防災図上演習等の実績紹介である。この活動を通して地震時の防災・減災を考えるうえで、一般の方にはなじみの薄い地質情報の活用が重要であることを強調したものである。

2) は2008年岩手宮城内陸地震で生じた災害のうち、岩手県祭畔(まつるべ)の地質災害の発生プロセスを解明したもので、IAEG2010オークランド大会でも発表したものである。

なお、3) は地すべり学会によるものであるため、ここでは説明を省略する。

展示は本会議の開催期間中5日間、毎日10時から20時まで行われた。展示会場になった「せんだいメディアテーク」5,6階の2フロアには、各国の政府、NGO、NPO、研究機関、学術団体のほか、企業など多様な組織からおよそ200のブースが展開した。メディアテークは7階までのほぼ全館がパブリックフォーラムの会場になり、土日は一日8,000人以上の参加・来場者があり、当方の展示スペースにも諸外国の防災関係者のほか、一般の家族連れなどで大いに賑わった。

初日は2学会の共同展示としたが、2日目からは日毎交番制とし、当学会は15日と17日に展示・説明をおこなった。東北支部の幹事・役員が2,3名で説明したが、本部から長谷川会長、大塚副会長、伊藤常務理事・総務委員長も来仙していただき、適宜学会の紹介などご支援いただいた。

展示では、地形の読み方と地質の関係をよりわかりやすく説明するためのツールとして、仙台都市圏の立体斜度図(1/2.5万)を前面に出し、来場者の興味を引くよう工夫した。



立体斜度図は横山空間情報研究所が独自に開発した技術で、DEM データを斜度図として表現、さらにアナグリフで広範囲を立体視できるようにしたものである。垂直誇張率は10倍と最大限に指定した。これは、仙台市街地が展開する河成段丘上のわずかな高低差、「長町一利府線」に沿うゆるやかな上方凸形状の変動地形、沖積平野内の自然堤防・浜堤列の微弱な高まりの発達状況、新第三系堆積岩からなる丘陵造成地の地形改変状況を際立たせる意味があった。結果は良好で、地形図になじみのない一般の方、仙台周辺に土地勘のない外国の方にも、立体地形解析図ビューワーを用い、TV 画面で地形図と照合しながら説明を行い、その地形をつくる地質・地盤の成り立ちについて理解を容易にしたはずである。



来場者は老若男女・国籍を問わず多数訪れ、なかには30分近くブースにおられた例もあった。特に、在仙のご年配の方々などは、戦前からの仙台の土地利用に関して、微地形や地質を巧みに利用してきたことなど、むしろ先方から教えていただくこともあった。藩政時代に構築された段丘面上のわずかな高低差を利用した用水路の展開状況、大正時代に10年ほど稼働していた水力発電所の取水設備の配置、戦争中に広瀬川の侵蝕崖から市街地に向けて鮮新統の軟岩を掘削した防空壕の存在など、これからの防災上も知っておくべき多様な情報が得られた。

こうした情報は、植生や市街地ビル群を除去した『裸の地表』を複数人数で眺め、地形変化を体感しながら話し合うことで、一層確かになるものと感じた。地物がびっしり入った都市部の地形図だけでは、とても地形起伏はイメージできない。

また、3月17日17:45-18:15には、展示ブースとは別に設けられたコミュニケーションスペース(ベンチ式)にて口頭紹介し、展示の概要のほか、両学会の活動紹介を行った。平日の夕方という最も客数の少ない時間帯にもかかわらず、熱心な聴衆も多数来場された。

また、期間中、説明用に作成した資料(一部加工)を添付する。

(文責・実行委員長 橋本修一)

